場の理論と弦理論@基研 2012年7月23-27日

AdS/CFT対応と物性物理

高柳 匡

京都大学基礎物理学研究所

はじめに $(\mathbf{1})$

素粒子理論の物性理論との関わり

1960- 自発的対称性の破れ (南部-Goldstone) 超流動









1980- 2次元共形場理論 → 臨界現象(Ising模型など)
 ビラソロ対称性 ユニバーサリティークラス

超弦理論のT-双対性 Kramers-Wannie 双対性 (小さい半径=大きな半径) (低温⇔高温)

双対性 = 一見、全く異なる理論が実は等価になる現象 (典型例:強結合=弱結合) Z[1/g] = Z[g]''

⇒高次元の量子臨界点(共形場理論)にうまい記述はあるのか?

AdS/CFT対応の発見 [Maldacena] 1997



古典重力解(ブラックホールなど) 強結合の高次元量子臨界点 ユニバーサル? (~No hair 定理 etc.)

2+1 or 3+1 次元

有名な例:クォーク・グルーオン プラズマの粘性 $\eta/s=1/4\pi$

物性物理の同様の例?

<u>コメント</u>

(注1) AdS/CFT において、古典重力(一般相対論、超重力理論) の極限と等価なゲージ理論は、ラージN極限で強結合極限。

 $\left(\frac{R}{l_{pl}}\right)^4 = N \to \infty \qquad , \qquad \left(\frac{R}{l_{string}}\right)^4 = Ng_s = \lambda >> 1 \quad .$

(注2) 物性物理における電磁場(U(1)ゲージ場)は、CFTの グローバル対称性と解釈し、SU(N)ゲージ対称性とは関係ない。 SU(N)ゲージ対称性の起源は、物性物理のSlave-particle 法 (RVB法)と類似していると推測されるが、 正確な理解はまだない。 $c_{\sigma} = \sum_{a=1}^{N} \underbrace{b_{a}^{a}}_{holon} \cdot \underbrace{s_{\sigma}^{a}}_{(spin)}$

「物性系のトイ模型?」「ユニバーサルな性質に着目する?」

(注3) ワインバーグ・ウイッテンの定理によると、「非自明で、 保存するエネルギー運動量テンソル $\partial^{\mu}T_{\mu\nu} = 0$ が存在す る理論では、スピン2以上の粒子は許されない。」

⇒重力子(スピン2)は、低スピンの粒子の複合粒子と思うこと ができない。AdS/CFT(ホログラフィー)は、時空の一部が Emergentに構築されるので、抵触しない。

(注4) η/s=1/4πは、古典重力で、空間的に等方的な場合に
 適用される。最近、非等方な場合に、破れることが示された。

例1 p-wave hol. superconductor ⇒ $\eta/s>1/4\pi$ [Gubser-Pufu 08] [Erdmenger-Kerner-Zeller 10,

See also Natsuume-Ohta 10]

例2 N=4 SYM with $\theta \propto X3$ ⇒ $\eta/s < 1/4\pi$ [Azeyanagi-Li-TT 09, Mateos-Trancanelli 11] [Rebhan-Steineder 11]

<u>物性物理に現れる量子臨界点の例(多くが2+1次元)</u>

銅酸化物高温超伝導、重い電子系、グラフェン、量子ホール効 果のプラトー転移点 など。

銅酸化物高温超伝導体の相図





Figs taken from Sachdev 0907.0008

ここ4,5年、AdS/CFTの物性物理への応用が盛んに議論 されるようになってきた。(AdS/CMP、AdS/CMTとも呼ばれる)

(2001 粘性の計算 (⇒QGP/Cold atom) [Policastro-Son-Starinets])

2006 エンタングルメント・エントロピーの計算 [Ryu-TT] 📫 5

2007 2次元量子臨界点の電気伝導 [Herzog-Kovtun-Sachdev-Son]

2008 超伝導の記述 [Gubser, Hartnoll-Herzog-Horowitz] ┢ ③

2008 非相対論的スケール不変性 [Son, Mcgreevy, Kachru et.al.] Non-rela. conformal Lifshitz

2008 非フェルミ液体の記述 [S. Lee, Liu-McGreevy-Vegh, Zaanen]

2011 ハイパースケーリングの破れと非フェルミ液体

[Ogawa-Ugajin-TT, Huijse-Sachdev-Swingle]

6

- 1 はじめに
- ② 電気伝導とAdS/CFT
- ③ 超伝導とAdS/CFT
- ④ フェルミ面とAdS/CFT
- ⑤ エンタングルメント・エントロピーとAdS/CFT
- ⑥ ハイパースケーリングの破れとAdS/CFT
- ⑦ おわりに

② 電気伝導とAdS/CFT



AdS/CFTの基本原理: (bulk-boundary 関係) [Gubser-Klebanov-Polyakov, Witten 1998]

$$Z_{CFT}(g_{\mu\nu}^{(0)}, A_{\mu}^{(0)}, \phi^{(0)}) = Z_{Gravity}(g_{\mu\nu}, A_{\mu}, \phi)$$

CFTの外場
 $\approx e^{-S_{Gravity}(g_{\mu\nu}, A_{\mu}, \phi)}\Big|_{on-shell}$
活動方程式の培界値問題

(2-2) 電気伝導率の計算

電荷を持った4次元AdSブラックホール(~金属状態)に
おける電気伝導度を計算する。
Maxwell方程式:
$$\partial_{\mu}(\sqrt{g}F^{\mu\nu})=0.$$

 $A_{\mu}(z,\omega) \underset{z\to0}{\approx} A_{\mu}^{(0)}(\omega)+z\cdot A_{\mu}^{(1)}(\omega)+...,$
 $A_{\mu}(z,\omega) \underset{z\toz_{H}}{\approx} (z-z_{H})^{-i\gamma\omega} \cdot a_{\mu}(\omega)+...,$
 $\Delta_{\mu}(z,\omega) \underset{z\toz_{H}}{\approx} (z-z_{H})^{-i\gamma\omega} \cdot a_{\mu}(\omega)+...,$
 $\Delta_{\nu} \lor \uparrow$
 $\Delta_{\nu} \lor \uparrow$
 $\Delta_{\mu}(z,\omega) \underset{z\to0}{\approx} A_{\mu}^{(1)}(\omega) \underset{z\to0}{\approx} -\partial_{\nu}^{2}\Psi + V(w)\Psi = \omega^{2}\Psi$
交流電気伝導度 $\sigma_{xx}(\omega) = \frac{j_{x}(\omega)}{E_{x}(\omega)} = \frac{A_{x}^{(1)}(\omega)}{-i\omega \cdot A_{x}^{(0)}(\omega)} = \frac{1-R(\omega)}{1+R(\omega)}.$

ドルーデ模型(電気伝導の基本)



2+1次元系のホログラフィック電気伝導度の概略

電荷を帯びたAdS BHなどにおけるゲージ場を用いて、電気伝導率を計算 すると重力場とも運動方程式が混じる。それを対角化して計算すると、 直流(DC)電気伝導度は発散する(ドルーデ丘がδ関数:Reo(ω)~δ(ω))。



有限の直流電気伝導度: (1) Probe braneの手法 [Karch-O'Bannon 07] (2) 格子構造 [Horowitz-Santos-Tong 12]

(2+1)次元量子臨界点での交流電気伝導度





Einstein-Maxwell-Scalar

⇒銅酸化物高温超伝導体の異常金属相の振る舞いと同じ!



 $Bi_2Sr_2Ca_{0.92}Y_{0.08}Cu_2O_{8+\delta}$

From Horowitz's talk at Strings 2012 ``Why General Relativity is like a High Temperature Superconductor''

③ 超伝導とAdS/CFT(ちょっとだけ)

電荷を帯びたAdSブラックホールに、複素スカラー場を導入する。 ⇒ Einstein-Maxwell-Scalar理論 [ホログラフィック超伝導: Gubser, Hartnoll-Hertzog-Horowitz 2008]

$$\begin{split} S_{EMS} &= \frac{1}{16\pi G_N} \int dx^4 \sqrt{-g} \bigg(R - 2\Lambda - \frac{1}{4} F_{\mu\nu} F^{\mu\nu} - \left| (\partial_\mu - iqA_\mu) \phi \right|^2 - m^2 |\phi|^2 \bigg). \\ V_{eff}(\phi) &= \bigg(m^2 - q^2 (A_t)^2 |g_{tt}| \bigg) |\phi|^2 \implies A_t \approx \mu \text{ が大きいと不安定}. \end{split}$$

$$\langle \phi(x,z) \rangle_{Gravity} \neq 0 \iff \langle O(z) \rangle_{CFT} \neq 0$$
 超伝導状態
[BCS理論とは異なり強結合]

A-A-C | | A / A





④ 非フェルミ液体とAdS/CFT

(4-1) ランダウのフェルミ液体と非フェルミ液体



<u>繰りこみ群的考え方</u> [Polchinski arXiv:hep-th/9210046]

 $\Delta E \propto \Delta k_{//} \ll k_F (\sim k_\perp)$ $\Rightarrow t = [E]^{-1}, \quad k_{//} = [E]^1, \quad k_\perp = [E]^0, \quad \psi = [E]^{-1/2}.$

$$S = \int dt (dp)^{3} [i\psi_{\sigma}^{+}(p)\partial_{t}\psi_{\sigma}(-p) - (E(p) - E_{F})\psi_{\sigma}^{+}(p)\psi_{\sigma}(-p)] + \int dt (dp_{1})^{3} \cdots (dp_{4})^{3}\psi_{\sigma}^{+}(p_{1})\psi_{\sigma}(p_{3})\psi_{\sigma}^{+}(p_{2})\psi_{\sigma}(p_{4}) \cdot V(p_{1}, p_{2}, p_{3}, p_{4})\delta^{3}(p_{1} + p_{2} - p_{3} - p_{4}).$$

電子間相互作用(クーロンカ、フォノン交換など) 大雑把には

 $\int dt \prod_{i=1,2,3,4} dp_{//}^{i} (dp_{\perp}^{i})^{2} \psi_{\sigma}^{+}(p_{1}) \psi_{\sigma}(p_{3}) \psi_{\sigma}^{+}(p_{2}) \psi_{\sigma}(p_{4}) \cdot V \cdot \delta^{3}(p_{1\perp} + p_{2\perp} - p_{3\perp} - p_{4\perp}).$

~ $[E]^{-1} \cdot [E]^{4} \cdot [E]^{-2} = [E]^{1}$. **⇒Irrelevant**(電子間相互作用は 低エネルギーで小さい)

但し、 $p_1 + p_2 = 0$ の時は、より詳しい議論が必要。



$$\delta^{3}(p_{1} + p_{2} - p_{3} - p_{4})$$

$$= \delta(p_{1//} + p_{2//} - p_{3//} - p_{4//})\delta^{2}(p_{1\perp} + p_{2\perp} - p_{3\perp} - p_{4\perp})$$

$$\sim [E]^{-1}$$
電子間相互作用は、Marginalになる。

$$V(E) = \frac{V_{0}}{1 + NV_{0}\log(E_{0}/E)}.$$

しかし、フェルミ面のある系に、masslessなボゾン場(スカラー場 やゲージ場)が結合している系を考えると今の議論は適用でき なくなる。⇒準粒子描像が成り立たない

このような場合は、ランダウのフェルミ液体とは異なる性質(電気伝導度や比熱の異常)を持つ系が現れることが知られ、 **非フェルミ液体**と呼ばれる。このような系は、強く相互作用しているので、複雑な量子論的な解析が必要とされる。

[Lee 09, Metlitski-Sachdev 10]

従って、AdS/CFT対応を用いた計算法が役に立つ可能性があり、 AdS/CMTの重要な動機の一つである。

[cf. 1+1 dim. Tomonaga-Luttinger Liquid \Rightarrow Free fermion Gopakumar-Hashimoto-Klebanov-Sachdev-Schoutens 12 $\Rightarrow \frac{SU(N)_N \times SU(N)_N}{SU(N)_{2N}}$]

(4-2) 非フェルミ液体とAdSブラックホール

AdS2

電荷を帯びたAdS BHに、フェルミオン場を導入する。

[Liu-McGreevy-Vegh 09]

<u>非フェルミ液体(</u>⇔ストレンジメタル相) [Liu-McGreevy-Vegh 2009]



[MFL: Varma-Littlewood-Schmitt-Rink-Abrahams-Ruckenstein 1996]



(4-3) 電子星(Electron Star) [Hartnoll-Tavanfar 10]

$$\begin{cases} R_{ab} - \frac{1}{2}g_{ab}R - \frac{3}{L^2}g_{ab} = F_{ac}F_b^c - \frac{1}{4}g_{ab}F_{cd}F^{cd} + T_{ab}^{STAR}, \\ \nabla_a F^{ba} = J_{STAR}^b. \\ Interest Transform Interest Transform Interest Transform Interest Transform Interest Transform Interest Intere$$

ンなども存在する。)

<u>Lifshitz geometry</u> [Kachru-Liu-Mulligan 08]

相対論的スケール不変性:
$$(t, x_i, r) \rightarrow (\lambda t, \lambda x_i, r / \lambda)$$

非相対論的スケール不変性:
 $(t, x_i, r) \rightarrow (\lambda^z t, \lambda x_i, r / \lambda)$

z: dynamical exponent

対応する重力解の形(z=1だとAdSになる)

$$ds_{Scaling}^{2} = -r^{2z}dt^{2} + r^{2}\sum_{i=1}^{d}dx_{i}^{2} + \frac{dr^{2}}{r^{2}}.$$

(4-4) これまでの(非)フェルミ液体の記述のまとめ

(i) AdS charged BH は、絶対零度でエントロピーが零でない

⇒低温で不安定。超伝導か電子星になると期待される。

(ii) 電子星は、低温でも安定で、フェルミ液体を記述。

⇒しかし、(i)と(ii)の両方で、フェルミ面を持つフェルミオンの系 は、重力側のone-loop量子効果に相当し、ずっと大きな O(N²)の自由度を持つ全く別の物質(グルーオン)が存在する。

疑問:AdS/CFTの古典重力の極限に(非)フェルミ液体は 存在するのか?⇒次の話題の動機の一つ。

⑤エンタングルメント・エントロピーとAdS/CFT (5-1)エンタングルメント・エントロピーの定義と性質

エンタングルメント・エントロピーとは、量子エンタングルメント (量子もつれ合い、絡み合い)の度合いを測定する量

➡「基底状態がどれほど量子的に複雑か?」をあらわす。

現在まで、様々な分野に応用されてきている。

- 量子情報、量子コンピューター(量子情報量の定義)
- 物性理論(低次元量子多体系のオーダーパラメーター)
- 量子重力理論(ブラックホールのエントロピーとの関係)

<u>エンタングルメント・エントロピーの定義</u>

まず、多体系の量子力学において、全体系を部分系AとBに 二分割する。このとき、もとのHilbert空間は、二つの Hilbert空間の直積に分かれる

 $H_{tot} = H_A \otimes H_B \quad .$

具体例: スピン系を2分割する。 A B A 全体系の密度行列を ρ_{tot} とする。 例えば絶対零度(純粋状態)では、 $\rho_{tot} = |\Psi\rangle\langle\Psi|$ 。

このときBを観測しない(Bをトレースアウトする)と仮定した場合の密度行列は、

 $\rho_A = \mathrm{Tr}_B \rho_{tot} ,$

と書け、これをAに制限した密度行列と呼ぶ。

この設定で、「Aに関するエンタングルメント・エントロピー」 S_A を ρ_A に対するフォン・ノイマンエントロピーとして定義する:

$$S_A = -\mathrm{Tr}_A \rho_A \log \rho_A$$

(5-2)エンタングルメント・エントロピーと物性物理

(i)密度行列くりこみ群

密度行列くりこみ群:自由度の圧縮を行って、量子多体系を 効率よく数値シュミレーションする方法。

このとき、「どれだけシュミレートしにくいか」 を測るのが、エンタングルメント・エントロピー。

[01 Osborne-Nielsen]

これは、量子相転移点で一般に発散する。

(ii)スピンチェイン系における量子相転移

外場中の量子lsing模型は、λ=1で量子相転移する





(5-3)場の理論における幾何学的エントロピー

場の理論におけるエンタングルメント・エントロピーを考える。 時空Mは、d+1次元で定義され、静的であるとする。

 $M = R_t \times N$.

このときHilbert空間をAとBの二つに分けるのを幾何学的に行う。(幾何学的エントロピーとも呼ばれる。)



<u>幾何学的エントロピーの面積則</u>

場の理論は、無限の自由度を有するので、幾何学的エントロ ピーは紫外発散する。基底状態に対して、次の面積則が知ら れている(aは正規化のための格子間隔)。

$$S_A \sim \frac{\operatorname{Area}(\partial A)}{a^{d-1}} + (\text{subleading terms}).$$

[Bombelli-Koul-Lee-Sorkin 86, Srednicki 93]

これはブラックホールのエントロピーの面積則に似ている。



(5-4) AdS/CFTとエンタングルメント・エントロピー <u>ホログラフィック・エンタングルメント・エントロピー</u> [Ryu-TT 06]



ここで、 γ_A は、d+2次元時空中のd次元の<u>最小面積曲面</u>で、境界が部分系Aの境界と一致するもの。

(AdS3/CFT以外は、一般的な証明はないが、多くの検証がなれてきている。 Casini-Huerta-Myers 11によってA=球面の場合は一般次元で証明された。)





*Y_A*があたかもブラックホールのホライズンであるかのように振る舞い、Bの情報を中に隠している。



面積則の破れ

d+1次元のフェルミオン系では、フェルミ面が存在すると、以下の ようにlog的にEEの面積則が破れる。[Wolf 05, Gioev-Klich 05]

$$S_A \sim L^{d-1}\log L$$
, (L=Aの大きさ).

[コメント]
(i)フェルミ面近傍の励起は、動径方向には`相対論的'になり、
2次元CFTで近似できる。logの振る舞いはそれに起因する。
(ii) 最近の研究で、相互作用でこの振る舞いは変わらないことが
分かってきている。[Swingle 09,10, Zhang-Grover-Vishwanath 11, Swingle-Senthil 11]

<u>AdS/CFTに基づく重力双対の解析(特にAdS4/CFT3を考える)</u>

仮定する計量の形(古典重力の極限で考える):

$$ds^{2} = \frac{R_{AdS}^{2}}{z^{2}} \left(-f(z)dt^{2} + g(z)dz^{2} + dx^{2} + dy^{2}\right).$$

漸近的 AdS ⇒ $f(0) = g(0) = 1.$

前述の of EE のlog的振る舞いを実現するには、

$$g(z) \rightarrow \left(\frac{z}{z_F}\right)^2 \qquad (z \rightarrow \infty).$$

となることが必要。 Z_F^{-1} は、フェルミエネルギーと解釈できる。

<u> ヌル・エネルギー条件</u>

重力理論が物理的に矛盾がない(例えばゴーストが存在しない など)ために、通常課す条件がヌル・エネルギー条件である:

 $T_{\mu\nu}N^{\mu}N^{\nu} \ge 0$ for any null vector N^{μ} .

これから、zが大きい赤外領域で、次の振る舞いが要求される:

 $g(z) \propto z^2$, $f(z) \propto z^{-2m} \implies m \ge 1$.

2+1次元系の比熱の振る舞いは、

 $C \propto T^{\alpha}$ with $\alpha \leq \frac{2}{3}$. [Ogawa-Ugajin-TT 11]

このことから、ランダウのフェルミ液体(α=1)は、AdS/CFTの 古典重力近似の範囲では実現できないことが分かった! ランダウのフェルミ液体ができないのは、CFT側が強結合だからと推 測される。このように比熱に異常が生じるが、フェルミ面が存在する 系は、**非フェルミ液体**と呼ばれていることは前述した。

[cf. Faulkner-Liu-McGreevy-Vegh 09:古典重力の範囲ではない]

具体的には以下のような、Einstein-Maxwell-Scalar理論を考えるとそのような解が得られる:

$$\begin{split} S_{EMS} &= \frac{1}{16G_N} \int dx^4 \sqrt{-g} \Big[R - 2\Lambda - W(\phi) F_{\mu\nu} F^{\mu\nu} - \partial_{\mu} \phi \partial^{\mu} \phi - V(\phi) \Big]. \\ V(\phi) + 2\Lambda &\approx -\frac{(p^2 + 12\,p + 32)}{4R_{AdS}^2} \cdot e^{-\sqrt{\frac{2}{p-2}\phi}}, \\ W(\phi) &\approx \frac{8A^2}{z_F^2 \, p(8+p)R^2} e^{3\sqrt{\frac{2}{(p-2)}\phi}}, \end{split} \right\} \Rightarrow f(z) \propto z^{-p}, \ g(z) \propto z^2, \ (p > 2). \end{split}$$

[このモデル自体に関しては既に多くの研究がある。Gubser-Rocha 09, Charmousis-Goutéraux-Kim-Kiritsis-Meyer 10, Goldstein-lizuka-Kachru-Prakash-Trivedi-Westphal 10,]

AdS: ゼロ温度極限での特異性が現れないためには、

 $\Rightarrow \alpha = 2/3$ [Shaghoulian 11]

CMT: スピン揺らぎの理論: [Moriya, Hertz, Millis 70'-90'] N Fermions + U(1) gauge: ⇒ α=2/3 (i.e. z=3) [Lee 09, Metlitski, and S. Sachdev 10, Mross-McFreevy-Liu-Senthil 10, Lawler-Barci-Fernandez-Fradkin-Oxman 06]

現実の物質: YbRh2(Si1-xGex)2 ⇒ α=2/3

Examples of heavy fermions [Pepin 11]

Compound	$H_c/P_c/x_c$	$\frac{C_p}{T} \rightarrow \infty?$	$\rho \sim T^{\rm o}$	Reference
$YbRh_2(Si_{1-x}Ge_x)_2$	$\begin{aligned} x_c &= 0.05\\ H_c^{\oplus c} &= 0.66T\\ H_c^{\perp c} &= 0.06T \end{aligned}$	$T^{-0.34}$	Т	Dresden, Grenoble
$CeCoIn_5$	$H_{\rm c}=5T$	$T^{-\alpha}$	T	Los Alamos, Grenoble
$Ce(Cu_{1-x}Au_x)_6$	$x_c = 0.016$	$Log\left(\frac{T_{0}}{T}\right)$	Т	Karlsruhe
$CeCu_{6-x}Ag_x$	$x_{c} = 0.2$	$Log\left(\tfrac{T}{T} \right)$	$T^{3,1}$	Gainesville
$CeNi_2Ge_2$	$P_c = 0$	$Log\left(\tfrac{T_{0}}{T}\right)$	$T^{1.4}$	Karlsruhe, Cambridge
U_2Pt_2In	$P_c = 0$	$Log\left(\frac{T_{c}}{T}\right)$	Т	Leiden
$CeCu_2Si_2$	Pc = 0	$Log\left(\frac{T_{\theta}}{T}\right)$	$T^{1.5}$	Dresden, Grenoble
$Ce(Ni_{1-x}Pd_x)Ge_2$	x = 0.065	$\gamma_0 - T^{1/2}$	$\rho_0 + T^{3/2}$	Los Alamos
YbAgGe	H = 4T	$Log\left(\frac{T_{s}}{T}\right)$	T	Ames, Grenoble
$CeIn_{3-x}Sn_x$	$p_c=26kbar$?	$T^{1.6}$	Dresden
U_2Pd_2In	$P_c < 0$?	Т	Leiden
$CePd_2Si_2$	$P_c > 0$	1	$T^{1.2}$	Karlsruhe, Dresden
$CeRhIn_5$	$P_{\rm c}\sim 1.6 GPa$?	Т	Los Alamos, Grenoble
$CeIn_3$	$P_{\rm c}>0$?	$T^{1.5}$	Dresden
$Ce_{1-x}La_{\pi}Ru_{2}Si_{2}$	$x_c = 0.1$	no	?	Grenoble
$U_3Ni_3Sn_4$	$P_c > 0$	no	2	Leiden

このような計量を持つ時空は、Lifshitz時空を ハイパースケーリングを破るように変形したとも解釈できる。 [Gouteraux-Kiritsis 11, Huijse-Sachdev-Swingle 11,

Dong-Harrison-Kachru-Torroba-Wang 12]

$$ds^{2}_{(d+2)} = r^{-(d-\theta)} \left(-r^{-2(z-1)} dt^{2} + dr^{2} + \sum_{i=1}^{d} dx_{i}^{2} \right) .$$

 $\Rightarrow C \propto S \propto T^{(d-\theta)/z}$. (θ = hyperscaling violation)

(6) おわりに



的計算を古典幾何学的な計算に置き換えることができる。

<u>AdS/CFTから導かれたユニバーサルな物理量の例</u>

<u>例1</u> 強結合量子凝縮系の粘性の計算(等方性を仮定)

$$\frac{\eta}{s} = \frac{\hbar}{4\pi k_B}.$$

[Kovtun-Son-Starinets 05]

(具体例:QGP,Cold Atom)

<u>例2</u> 格子構造のある異常金属の光学電気伝導度

$$|\sigma(\omega)| \approx B \cdot \omega^{-2/3}.$$

[Horowitz-Santos-Tong 12]

<u>例3</u>フェルミ面のある強結合(2+1)次元系の比熱

[Ogawa-Ugajin-TT 11]

$$C \propto T^{\alpha}, \quad \alpha \leq \frac{2}{3}.$$

今後の展望

- AdS/CFT対応は、強結合の量子凝縮系の新しい解析法と考えられ、
 定性的なレベルではうまく行っているように見える。定量的には、ユニバーサルな量に着目する必要があり、そのような例を開発することは今度の課題の一つである。系統的な理解も必要。
- また、非平衡ダイナミクス、ランダム系への応用も今後期待される。
- ホログラフィー原理は、現在でも理解されていない量子重力の問題
 を超弦理論に基づいて解決する上で、最も重要な鍵と思える。物性
 理論や量子情報の手法も大いに役に立つ可能性がある。

例: ブラックホールの情報損失問題 de Sitter空間やビッグバンにおける量子重力など MERA (Multiscale Entanglement Renormalization Ansatz) とAdS/CFT [MERA, Vidal et.al. 06, Swingle 09, Nozaki-Ryu-TT in preparation]



カバーできなかった他の話題

- トポロジカル絶縁体、量子ホール効果
- 不純物効果(Quenched Disorder)
- 非平衡ダイナミクス [⇒中村さんの講演]
- Semi-holographicな記述 [⇒礒野さんのポスター講演]
- フリーデル振動とAdS/CFT
- ラッティンジャーの定理とAdS/CFT
- 様々な模型の超弦理論への埋め込み

などなど

参考文献(レビュー論文)

- AdS/CMT 全般: Hartnoll arXiv:0905.0932 Mcgreevy arXiv:0909.0518
- Hol. 超伝導: Herzog arXiv:0904.1975 Horowitz arXiv:1002.1722
- Hol. Fermi 面: Iqbal-Liu-Mezei arXiv:1110.3814
- エンタングルメント: Nishioka-Ryu-TT arXiv:0905.0932 TT arXiv:1204.2450